

自由と個性という 校風を現代に継承し、 感性を育む教育を

文化学院 校長 戸田 二雄
取材文／堀水潤一 撮影／中岡邦夫



【校長プロフィール】1941年生まれ。2003年松下電器産業副社長、06年松下国内マーケティング大学学長。滋賀大学特任教授、京都工芸繊維大学特任教授。08年より文化学院理事長兼校長。

【学校プロフィール】1921年西村伊作、与謝野鉄幹・晶子らにより創立。2008年新校舎完成。09年度より、放送・映画学科（放送、映画コース）、総合芸術学科（音楽・ダンス、演劇・声優、総合デザイン、美術・クラフト、文芸コース）体制に。

文化学院は今春 現代の若者にフィットする新しい学校としてスタートします。学科編成を拡充すると共に、最新設備を備えた14階建ての新校舎に流の講師陣を迎えます。これらの改革は時代の要請に応えるものですが、創立以来の自由と個性を尊重する校風を転換するものではありません。むしろ、新たな価値を見出し、人間の奥行きをつくる感性の教育を積極的に取り入れ、基礎教養を重視する伝統も受け継ぎます。

これまで本学は各界に多くの著名人を輩出してきましたが、在学中の専門ではなかった分野で活躍されるケースも多いようです。専門だけでなく基礎教養を徹底して身につけられたからでしょう。

専門学校の役割として即戦力を養うことは当然ですが、表面的な技術を身につけるのではなく、そのベースとなる基礎力を育むことは何より重要です。

このため、例えば演劇・声優コースで「ロミオとジュリエット」の公演をするのであればシェイクスピア研究や時代背景から学んで頂くことになります。また、声優志望の学生は、すぐマイクの前に立てると思いがちですが、基礎学習や身体訓練から入ることになります。

講師陣もそうした考えを持つトップクラスの方々です。デザイン評論家の柏木博先生はCG全盛の時代にあつてアナログで基礎から学ぶことの必要性を説いておられます。

高等課程（中学卒業生対象の3年制）では映画創りを教育のツールとして捉えたユニークな授業を行います。全コースで必修するシネマリテラシー教育です。映画は総合芸術であり、基礎教養を育む上で大変、効果的です。映画創りを通じてチームワークが高まり達成感が味わえますし、シナリオを書く際は人間を深く洞察することになるのです。

こうした授業は10代〜20代はじめの若者の感性を大いに刺激するでしょう。感性とは抽象的なもので「あなたの感性レベルは50です」という指標はありません。あれば教育もしやすいのですが、それが無いのが感性です。

アナログを重視し、基礎に比重を置く授業や、一流の講師陣との触れあい、またBS放送局などの協力を得て行う現場実習などを通じて感性を磨いてほしいと思います。類似商品ばかりがあふれる現代日本において感性を伸ばすことは、これからの社会の発展につながると信じています。